

氏 名 加 藤 善 朗

学位（専攻分野） 博士(学術)

学 位 記 番 号 総研大甲第359号

学位授与の日付 平成11年3月24日

学位授与の要件 文化科学研究科 国際日本研究専攻

学位規則第4条第1項該当

学 位 論 文 題 目 当麻曼荼羅講讃と中世浄土教

論 文 審 査 委 員 主 査 教 授 笠谷 和比古

教 授 頼富 本宏

助 教 授 早川 聞多

教 授 河原 由雄（愛知県立大学）

山折 哲雄（白鳳女子短期大学）

論文内容の要旨

本論は、「講讃書」と呼ばれる絵解きの台本を史料として、中世浄土教における図像と思想の往還関係をあとづけようとする試みである。研究対象として当麻曼荼羅ほか浄土教美術の遺品を対象とする。

第1章では当麻曼荼羅が受容された背景について考察し、第2章では原本の転写の過程で生み出された意図的な改変に焦点を当てて考察する。第3章では当麻曼荼羅の講讃が生み出したと考えられる図像について考察する。

第1章

第1章では宗教体験とイメージの獲得（第1節）、図像に啓発された思想の変化（第2節）を考察した。

当麻曼荼羅は多くの遺品が伝存している。これと併せ浄土三曼荼羅と称せられる智光曼荼羅12本・清海曼荼羅9本と比較して、180と圧倒的に多い。当麻曼荼羅と同じ曼（きょう）良耶舎訳にかかる『観無量寿経』を絵画化した観経十六観変相図は朝鮮半島で流布したのに対し、日本での転写例は僅か2例でしかない。

観経十六観想図が元照の『観経義疏』の内容に沿っているのに対し、当麻曼荼羅は、善導の『観経疏』により忠実な絵画である。

奈良時代、中国から将来された当麻曼荼羅は、13世紀末から急速に流布しはじめる。当麻曼荼羅に限り、なぜこのような現象がおこったのだろうか。その理由は当麻曼荼羅は浄土の有様を描いた極楽絵の周囲に『観無量寿経』に説く王舎城の悲劇（序分義）と13の観想法（定善義）、9種の来迎図（散善義）を一連の紙芝居のごとく描いており、法然門下の浄土教教団によって講讃を目的とする図像として利用されたからである。

講讃では絵像→経典→疏→因縁・譬喩という循環運動で絵解きが進行する。『不審抄』『曼陀羅聞書』では25箇所、教典・注釈書にはない場所が議論となっている。つまり経典や注釈書の文義を越えて、図像が重要視されている。

視聴覚のメディアはもとより古今東西のものである。なぜ、鎌倉時代、当麻曼荼羅は絵解きされなければならなかったのか。それは当麻曼荼羅自体が、善導の思想と法然の宗教的境地をあらわしたものと捉えられ、そこに込められた意味を読み解く必要があったからと考える。

第2章

当麻寺の観経浄土変相図が世に知られるようになったのは、貞応3年（1224）完成した建保本の作成と同時期である。建保本とは原本（根本曼荼羅）の最初の転写本であるが現存しない。

13世紀から14世紀にかけて、当麻曼荼羅は転写はピークをむかえる。基準作例をならべただけでも、多くの様式が併存していたことが明らかである。第1節では、講讃書をもとに建保本の成立背景を考察し、その図様を比定した。また第2節では、現存遺品を中央三尊と周辺地色の賦彩方法に着目して8タイプに分類し、初期の転写本の賦彩方法について考察した。光明寺蔵『当麻曼荼羅縁起』の画中画から、原初形態の賦彩方法は、周囲を銀泥で描き、宝池は金泥、散善義の来迎の菩薩衆も金色に描き、中央舞楽会を朱で彩る時光寺本、鎌倉光明寺本の様式であると思われる。

ほとんどの転写本は、〈転写〉とはいいいながら、あえて意識的に図像に変更を加えたと考えられる。本論では絵を前にした講讃書を史料として、立像と金色という意匠にこめられた意味を考察した。金色の表現という点に限って言えば、図像に啓発・規制されて講説がおこなわれ、講説にひかれて絵が変化するというものではなかったか。

第3章

二河白道図・観経序分義曼荼羅・遣迎二尊像という、わが国独自の浄土教美術の遺品がある。これらはみな善導の『観無量寿経疏』を題材としたものである。

当麻曼荼羅の示現譚が多様なテキストを持つ中将姫説話として展開したように、絵解かれることによって図像の持つ意味は変容し、素材そのものを改変していく。第2章では、当麻曼荼羅から派生した序分義曼荼羅（第1節）と二河白道図（第2節）について考察する。

〈観経序分義曼荼羅〉はその名が示すように当麻曼荼羅から序分義から一部を取り出したものと考えられている。しかしなぜこの部分が取りだされたのかは明らかにされてこなかった。第2節では当麻曼荼羅講讃書を検討し、その部分に込められていた意味をさぐり、独立の図となった過程を考察する。

二河白道図は善導の『観経疏』散善義上品上生釈の廻向発願心のなかに説かれる譬喩を絵画化したものである。鎌倉時代中葉からあらわれた初期の二河白道図には、善導の著書に記述のない数多くのモチーフが画かれている。これらにも何らかの説話が付されていたことが予想される。当麻曼荼羅の図像の中に、二河白道は存在しない。しかし当麻曼荼羅の絵解きに際しては、これらに相当する説話が説かれた。つまり説話を遺しつつ当麻曼荼羅は二河白道図に取って代わられたと考えられる。二河白道図の上に当麻曼荼羅から生み出された影を残している。

このように考えると講讃の隆盛が素材である教義や思想を改変し、当麻曼荼羅から図像が写用され、あらたな図像を再生産していったといえる。

結論

〈影向図〉〈感得図〉と呼ばれる創出の縁起が何らかの宗教体験とともに語られる図像・彫像は、枚挙にいとまがない。平安後期の作例である船中湧現観音は、空海が入唐の途上暴風雨に遭い、それを鎮めようとした際にあらわれた観音の図絵化である。また定智筆善女竜王像は天長年間、空海が神泉苑で請雨の行法を修した際、その法験によって愛宕山に出現した竜王の姿を弟子に描かせたものと伝える。明恵も郷里で文殊像の曼荼羅を感得し、それを絵師に描かせている。熊野権現影向図や立川流本尊も影向や夢告によってもたらされたものである。当麻曼陀羅にかんしていえば、法然の三昧発得で得たヴィジョンが證空によって当麻曼荼羅と一致することが見いだされ、證空や親鸞、一遍の思想形成に重大な役割をはたし、重源の膝下集った勸進聖によって転写され、絵解き・講讃が盛んになるにつれて序分義曼荼羅・二河白道図・遣迎二尊像などの母胎となった。

図像の感得という現象と、宗教絵画の創出とは密接な関係にある。とはいえ、いかなる図像も体験そのものを表現することは不可能であるし、描写された体験と実際の体験とは懸隔がある。ただし一遍における二河白道図や、證空の聖徳太子夢中顕現曼荼羅のように、図像との邂逅が、宗教経験（夢告・感得）をひきおこし、あらたな図像を生み出してきたことに中世浄土教における当麻曼荼羅の特質があると言える。

本論文は、浄土三曼荼羅の一つとされる当麻曼荼羅の各種の転写本、図様を解説した講讃書、ならびに同曼荼羅から派生・展開したと考えられる序分義曼荼羅や二河白道図などの浄土教絵画を主たる資料とし、最初、中国の善導の『観経疏』に説く極楽世界を表現した当麻曼荼羅が、講讃を通じて絵解かれることにより、次には民衆の要望や時代の要請を受けて新たな図像を再生産した過程を探ることによって、中世の浄土思想がその内容を豊かにして行った事実を解明しようと試みている。

従来、仏教学・仏教史の視点からは、法然・親鸞を中軸とする鎌倉浄土教は、選択を特色とする専修念仏によって象徴されるように、その思想や実践の中には、浄土や阿弥陀如来の姿を表現する視覚的教化法は重視しないとされてきた。

しかし、本論で最初に強調されるように、西山派の祖・証空によって『観経疏』に説く極楽浄土図と異ならないと再発見された当麻曼荼羅は、思想・教義としての極楽浄土や阿弥陀如来よりも強いインパクトをもって中世の人々の間に流布していく。なかでも、中央の極楽浄土図（玄義分）よりも、周縁の韋提希夫人の帰仏（序分義）や九品往生（散善義）の方が広く普及し、かつ図像的变化を生み出したのは、人間が登場することによって講讃に適していたと考えることができる。

第一章で説かれる当麻曼荼羅受容の背景としては、直接同曼荼羅を拝していなかったとされる法然が、三昧発得という宗教体験を通じて極楽のイメージを体得したことを醍醐寺本の『法然上人伝記』などの新史料を用いて論証する。後に続く証空が当麻曼荼羅を再発見するモチーフとともに、宗教体験が表現される図像と無関係でないことを示している。

なお、本論は従来の研究では証空の真撰とされてきた『当麻曼荼羅註』を、その内容等から判断して、室町時代に西山派の者によって撰されたという新説に則って論旨を展開する。同説に対しては賛否両論あるが、資料としては、証空の孫弟子の顕意道教の『曼荼羅聞書』、撰者不詳の『不審抄』などに拠るところが多い。

第二章では、原本当麻曼荼羅の最初の転写本である建保本の成立背景を、願主・絵師等の検索によって探る中で、東大寺南大門仁王像納入経巻を史料として恵阿弥陀仏という人物から、有名な俊乗坊重源を中心とする勸進聖集団との密接な関連を導き出している。

伝証空撰の『当麻曼荼羅註』に説かれる見阿も重源との関連が窺われ、彼此総合すると、建保本の成立とほぼ同時期に証空が当麻曼荼羅を初拝するとともに、その転写と普及に関わった事実を確認できるとしている。かかる行動は法然以後、重源を軸とした勸進聖の活動の延長線上に位置付けることができるだろう。

第三章では、当麻曼荼羅の派生図として、序分義曼荼羅、二河白道図、遣迎二尊図などの一連の浄土教絵画を取り上げ、それらの図像の中には当麻曼荼羅の周縁部、とくに序分義の欣浄縁の図像が有効に取り入れられていることを論証している。一部に先行研究の成果を十分に生かしていない感もあるが、来迎図・浄土図とも関係を持つ二河白道図を細分類し、広義の当麻曼荼羅が新たな図像を生み出した過程を復元した点は評価できる。

以上、当麻寺の原本曼荼羅が鎌倉時代に再発見され、講讃という視覚と口述をともなう教化方法によって展開した中世浄土教の一面を描き出そうとした着眼点と努力は評価に値するといえる。もっとも、具体的方法論として巨視的思想展開と美術史的論証の面で咀嚼

不十分な点が認められるのは惜まれる。とくに当麻曼荼羅の転写本の系統分類の試みと二河白道図の詳細な分類、さらには遣迎二尊図との先後関係などについては、より緻密で説得力のある考察が必要であろう。

このような改善点もあるが、平安浄土教とは異なった性格を持つ鎌倉浄土教の一部門、しかも神仏習合を説く一遍とは相違する情緒的浄土教を大きな視野から解明しようとした論旨を積極的に評価して、学位授与を可とする旨の結論に達した。